

検討会等名称	第1回福祉を科学する検討会
開催日時	令和6年6月6日（木）14時00分～16時20分
開催場所	東庁舎11階111会議室
出席者	大川委員、高原委員、中西委員、羽生委員
問合せ先	障害サービス課独立行政法人化グループ
会議概要	以下のとおり
<p>【議題1について】 意見なし</p> <p>【議題2について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 障害当事者の生育歴を見る視点が、今は施設によって異なるため、統一的な見方ができるような研究や、生育歴と国・県の制度、社会情勢などを重ね合わせ、それらが障害当事者の人生にどのような影響を与えているのか、研究してもよいと思う。 ○ 誰でも支援できるようになるメリットがある一方で、他の支援を考えなくなる危険性がある。職員たちが利用者支援に悩み、考え続けるためにも、福祉の倫理を研究してはどうか。 ○ 福祉業界だけではうまくいかなかったと感じるため、倫理の研究にあたっては異業種の人も入ってもらいながら、議論を続けていくのがよい。 ○ プロジェクトチーム方式で研究を実施するのはよいと思うが、他の研究と差別化を図るためにも、担当する職員は、第一線で悩みながら、専門性を高めている人に入ってもらった方がよい。 ○ 研究は、障害当事者の人生を見ていく中での研究ではないか。そのためにも自然科学的アプローチと人生を一つの物語として捉えた文学的なアプローチを融合させた方がよい。 ○ 文学的なアプローチのためには、生育歴、障害福祉の歴史や人間の発達のプロセスといった、支援の前提となっている部分を学ぶことが大切である。 ○ 措置から契約制度になった頃から「アセスメント」という言葉が強調されるようになった。その頃から、利用者と職員の関係から「共感関係」が抜け落ち、希薄化していったように思う。 ○ 今はチームで支援とこいつつ、利用者支援をめぐる議論することもなく、シフトに入っている職員が個人で支援してしまっている。そのため、マニュアルに利用者の行動を合わせようとして、虐待につながっているのではないか。 ○ 福祉職は、利用者のすべての情報を知って、その中で関わっていく専門職であるという認識に立つと、アセスメントシートの内容だけでは情報が全然足りないと思っている。 ○ ある現場では、対人援助が形骸化し、人と人との関わりがなくなっていた。 <p>【議題3について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 職員として最低限必要なことは、「人を好きであること」「目の前に困っている人が 	

いれば、助ける」ことだと思う。

- 利用者を中心にした議論を多く実施する場が必要ではないか。現場では、利用者を切らない、切り捨てないでいることによって哲学が生まれると考えている。
- 現場には幹部も部下もなく、役割が違うだけである。利用者を一番理解し、利用者のために組織を動かす力を使える人が幹部になる。
- 職場環境として「人を好き」ということを表現できる環境であることが大切だ。
- 過去のデータと未来に向けた兆候を感じるための感性が必要だが、現場には感性が圧倒的に不足している。
- 利用者を対象化せずに、一体化するような成熟した人間関係を築くことが大切ではないか。
- 障害福祉業界では、現場が現場に熱中するあまり、支援の体系化がされてこなかったと感じている。
- ある現場では、かつて、メンター制度を取り入れたが、今は人手不足もあるが、みんなで声をかけていこうという方針になっている。

【議題4について】

- 何を聞くかよりも誰に聞くかが大切であり、アンケートではなくてもよいかもしれない。
- 「利用者を切り捨てる」など、それぞれの現場で「絶対にやってはいけないことは何か」という視点でヒアリングしてみてもよいと思う。